吊草村（イ族の村）

大理から 6km のところにある、通称草の村と呼ばれている吊草村を訪れた。資料によって数字が違うが 300 軒近く、人口が 1500 人くらいの小さな集落と資料にある。ここは海抜 2,000～2,300m の高地で、年間平均気温も 16℃。降水量も 600mm と少ない。村の主要農産物は大麦ととうもろこしで豊かな農村ではない。中国の資料には貧困村の文字さえ記載されている。少数民族の村を訪れたいと頼んでいたところ、ガイドが選んだ村である。六つのグループのイ族が昔から住み着いている典型的なイ族の村と紹介された。

村は道路から下に広がっている。前方に山があるので、その間が生活圏になっているようだ。村の建物は一個の城を思わせるように固まっている。道路にバスを止めて降りると早速イ族の民族衣装を着た老婦人に出会った。買い物でもしてきたのか、手に小さなビニール袋を提げていた。

黒い帽子をかぶっているのがイ族の象徴らしい。資料で見たことがある衣装を実際に目の前にして、その色彩と手の込んだ作りに皆で感嘆の声を上げる。ガイドが話をしている間に写真を撮るが快く応じてくれた。

イ族のあらまし

村の様子の前にイ族のあらましを紹介しておきたい。

イ族は中国全土に約 650 万人（中国民族の 8 番目の人口）。その内、雲南省に約 470 万人が住んでいる。他には四川省、貴州省、広西壮族自治区、湖南省の山岳丘陵地帯に分散している。

2000～3000 年前に南東チベットに住んでいた遊牧民の羌人が青海省、四川省を通って、雲南省に住み着いたが、明代に移住してきた漢族に追われて山岳地帯に移転して現在にいたっている。

雲南省の中では楚雄と紅河付近に多く、自治州となっている。そば、麦、粟、とうもろこし等の穀類や豆類を栽培し、若干の果物を作り、豚や鶏を飼育して生活している。刺繍と銀細工に長けていて、特に民族衣装にも使われている花の刺繍に特徴がある。年配者の女性は黒い帽子で髪をかくすのを慣わしとしている。宗教は基本的には自然崇拝であるが、今では仏教、道教、回教を信じている人たちもいるら

しい。資料には住宅は木造と泥レンガで作られているとある。

イ族の家屋

村の入り口に橙色の瓦で葺いた大きな建物がまず目についた。表に回ってみると、見事な門構えと装飾が施された白壁である。この辺の屋敷は装飾が施されている程格式が上だと聞いている。余程な有力者か、寺院ではなかろうか？屋敷も入母屋造りになっていて、色瓦の屋根である。村を見て回った範囲ではこれほどの立派な建物を他に見ることがなかった。

狭い曲りくねった道は舗装されている。左の灰色の瓦を切妻造りの屋根に葺いた木造二階建ての母屋と作業に使う中庭。それを白い壁で囲んでいる。これがこの村では一般的であった。右の建物はくずれてしまって、人が住んでいない。

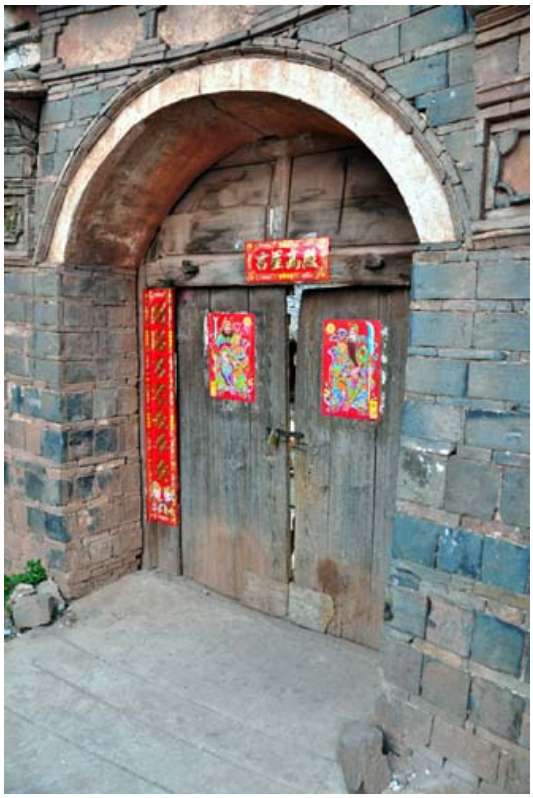
右の写真でわかる様に木造で道路側の壁は土のレンガを積み上げて、漆喰を塗って白壁にしている。

白壁には絵が描かれ、タイルで装飾している家もある。

舗装は村への入り口付近だけでこのあたりに来ると、細かい砂礫を敷いてあるだけになっていた。

壁の装飾や門構えは夫々違っていて面白い。中国では表札の習慣がないから何家の屋敷かわからない。中国の資料によると、この村は黄家と呉家、その他の 6 グループの村とある。おそらく一族の本家と分家があって似たような造りや装飾になっているのではと思うが確かめようがない。外から中の様子がわからないのは日本の農村と違って閉鎖的である。民族争いの多かった歴史がそうさせているのかもしれない。

村の中のごく一部分しか歩いていないので商店を見ることがなかったが前頁下段右の家は扉が多く開放的である。或いは商店かもしれないがのぞいて見なかった。



上の写真は壁に穴が開いていて、「小売部」と書いてある。のぞいてみたかった。下はオート三輪。日本の農村で使われている軽トラというところだ。先の巍山でのオート三輪のタクシーといい、まだ実用されていることに郷愁を感じさせる。右は春節の飾りをつけた個人の住宅の門である。

もっと下に降りて畑のあるところを見てみたかった。何を栽培し、どの様な農機具を使っているのだろう。興味はつきないがここで一軒の農家を訪問することになっている。村歩きを早々に引き上げざるを得なかった、

（吊草村つづく）